
主人公の歩む道（恋愛編）

海上なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公の歩む道（恋愛編）

【Nコード】

N5372G

【作者名】

海上なつ

【あらすじ】

ある男女の二つのショートストーリー。物語の主人公はハッピーエンドとなるのか、はたまたバッドエンドを迎えてしまうのか。結末は意外なものが待っている——かもしれません。どうぞ最後まで見守ってやって下さい。

ある男の場合

天使は突然現れる。

いや、一目見て僕の天使だと直感することがあったのだ。

「こんにちはあ」

この笑顔を例えたら何であろうか？

太陽か…ひまわりか…。

すでに使われているものでは、安っぽく響いてしまう。

かといつて的確な表現はすぐに思いつかないが、とにかくそんな類いのものだった。

花粉症のせいで、さつきからくすんくすんやっていた鼻をこすった。実際は初めての感覚に、ちょっと恥ずかしくなったのかもしれない。この季節は嫌いだが、僕の心の中には嬉しい春が到来したようだ。春万歳だ。

いつもの一目惚れという感覚ではない。運命の人を見つけたとさえ感じている。

「どつぞ」

そう言つて、彼女がティッシュを僕のために差し出してくれた。

その時、微かに触れた手が冷たくて涙が出そうになった。

誰にでも優しく、他人のために文句も言わず働くところが好きだ。でも付き合つて下さい、と言うのもおこがましい。

そんな心境で無言で立ち止まっていると、彼女はまた僕に手を差し出した。

「お願いします」

日常生活で四字熟語を思い出したりはしないのだが、この時は”以心伝心”という言葉の存在を実感した。

これは…伝わったってしまったのかもしれない。

そして、これはOKの返事だろう。それで握手を求めているのか。もちろん、僕は幸せに満ちた顔で彼女の手を握り返す。

が、彼女の肌には届かず、くしゃっと間抜けな音をたてただけだった。

そして敵もまた、突然発覚するものだ。

彼女を困らせる人物は誰であろうと許せない。

「よお」

「え！ちよつと、何でいるの」

「それ全部もらってやるっか？」

「やめて！帰ってよ」

「何だよ」

「あんたの誕生日プレゼントのためなんだからあ」

「マジで」

聞きたくない会話だった。

皆にふりまくあの笑顔は、全て偽物だったということなのか。

あいつを想って…金のために…。

そんな風に僕に笑顔をくれたのか。

こんな時、悪い考えしか浮かばない自分の脳を恨んだ。

ラストチャンス！

彼女に再び近づこうと、ふらふらと力のない足を動かす。

が、緊張とショックで転びそうになった。なんて格好悪いんだ。

そして咄嗟にあいつの腕をつかんでしまった。

彼の着ていたもの——陽にあたって暖かくなったダウンジャケットが心地よくて、今度こそ本当に涙が出そうだった。

言葉はもう出ない。というか、一言も発せずに終わった。

涙で滲んで前が見えない。というか、もう見えなくていい。

今日の出来事はなかったことにしよう。現実なんて見たくない。春なんて大嫌いだ。

でも花粉症だという事实は、認めざるを得ない。だってそのせいで涙と鼻水が止まらないんだ…。

さよなら、僕の天使。

もう会うこともないだろう。

君のくれたティッシュはすぐに使いきると誓うよ。二つなんてあっという間さ。だって僕は花粉症なんだから…ね。

さよなら、ティッシュ配りのお姉さん。

ある男の場合（後書き）

<解説>

…するまでもないですね。

でも”激しい妄想男の話”で片づけられるのも作者としては悲しいので、フォローを少し。

現実vs理想で勝つのはやっぱり現実だということです。理想ばかりふくらませて後で痛いめにあうということを、身をもって知れたということ、結果よかったんじゃないでしょうか。

無理やりですね。

ある女の場合

「ある人をちらちら気にするってことは、やっぱり好きなのかな？」

「何、急に」

「Pに好きな人できたみたいなの」

「嘘おショック！で、相手は？」

よく他人のことでそんなに熱くなれるものだ。

最近席替えをしたせいで、噂好きで有名な女子二人組の話し声が、嫌でも聞こえてくるようになった。

彼女らはクラスが違うらしく、お昼休みはいつも教室に入らずに廊下で立ち話をしている。それで廊下側の窓にくっついていて席が、ちょうど私のというわけだ。

ちなみにPとは、我がクラスの人気者。成績優秀で運動神経抜群、おまけに金持ちの美形だそうだ。ある女子が命名したそのあだ名は広まって、いまや校内共通となっている。プリンスの頭文字であるPらしい。…くだらない。

「あの眼鏡かけてる人」

急に声が遠くなったかと思えば、窓を開ければいいのに、わざわざ前の扉からクラスを覗いていた。実際、声のボリュームも下げていた。

しかし、おかしい。

なぜか私を指さしているのだ。明らかにそうなのだ。それからすぐに顔を引っ込めて、話を続けた。

「あの子からラブレターをもらったみたい」

「真面目そうなのに、やるねえ」

私が？… Pに懸想文を？
そんなバカな。

「ちょっといいかな」

その声は室内からだった。噂の男が私にそう言って、無言で教室を出ていったのだ。

これは誤解を解くチャンスだと思い、私はPの後を追った。ほとんどの生徒から注目の目があったが、今は気にしない。しばらく歩き、やっと止まった場所は体育館裏だった。

このシチュエーション——と考える間もなく、Pは言った。

「これ、俺の机に入れたの君だよな」

「はっ？」

全く予想しなかった言葉に、力が抜けた。

渡された紙切れには、『正体判明 裏切り者』と書いてあった。これには見覚えがあった。確かに、私自身が書いたものだった。

唯一クラスで冷静だった私に目をつけて、筆跡鑑定でもしたのだろうか。

でも——。

「だって、カミングアウトのタイミングが分からなかったんだよ！」

くやしいことに、ずっと私よりもこいつの行動の方が早い。

そして勝手に先走っていく。呆然とする私を残して。

「同じ中学から来た人いないし、第一印象だけで中身を決めるなんて酷いよ。いい点とって先生に褒められたのは最初だけで、本当は

赤点とらないようにするのが必死だし、スポーツだってサッカーは習ってたからできるけどそれ以外はルールすら知らなかったし、金持ちだってただの勝手な想像だ！…皆俺のこと勘違いして尊敬したり、意味不明な呼び名つけたり！何なんだよ一体」

「…確かに、それは皆が美化しすぎたね」

「俺、どうすればいいかな？ずっと誰かに相談したかったんだ」

まさかの展開だ。学校一の人気者に頼られるとは。

激しくどうでもいいが、目の前のこいつを救ってやりたい気持ちはあった。

なによりも純粋な相談事だ。笑っちゃうほど本気なのだ。

「見られているところで、わざとらしくため息でもついてみたら？たまには不幸オーラを出さなきゃ、いつまでもキラキラの王子様だよ」

「なるほど」

「それで、どうしたかと訊かれたら、弱々しく『うん』とだけ言うこと。これで無駄にきやあきやあ騒ぐことに申し訳なく思う女子が増える。あんたのことを想うならなおさらね」

「ふむふむ」

「それとね、勉強にしろ運動にしろ、理想に追いつこうと努力することはプラスに考えたらいいんじゃないかな？そうしたらきっと、いつか内側の面の理解者が現れるよ」

彼は何か考えているようだった。

そしておもむろに言った。

「勉強教えてよ」

「私が？」

「君ってさ、休み時間はたいてい席について本読んでるけど、眠た

いの我慢してるの分かるんだ。それで家でも頑張ってるのかなって。授業中もいつも真剣だし。実際テスト返す時、『頑張ったな』って毎回先生に言われてるでしょ」

「…よく見てるね。そんなこと言われたの初めてだ」

「じゃあ、俺は、君の第一理解者になれたのかな？」

「え？」

「そして君は——俺の第一理解者でもある」

「変な関係」

「そうかな」と笑う彼と一緒に、やっと私は心の底から微笑むことができた。

実を言うと、きっかけは全くの偶然。つまり自分から相手を分かろうとしたわけじゃない。

だけど結果的に私は彼の内面を知れた。そして私にも理解者が現れた。

それは本当に嬉しいことだ。だからこのことは秘密にしておこうと思う。

「あ、また書いて今度こそ渡さなきゃ」

「ん？」

「なんでもない。そろそろ予鈴鳴るよ」

「あ、あのさ！今日もし暇だったら、早速勉強教えてほしいんだけど」

「誰かに見られたらどうするの？まだ皆、あんたのこと誤解したままだよ」

「いいんだ。自分に正直に生きるって決めたから」

「そっか、分かった。…じゃあ放課後、図書室で」

「ありがとう」

その日の放課後、ある女子生徒が紙を見つめながら図書室へ入っていった。

そこにたまたま居た友達が「何借りるの？」と訊くと、彼女は笑ってこう答えた。

「クラスの読書家の友達にお勧めの本を紹介してもらって。忘れっぽい私にわざわざメモしてくれたんだよ」

彼女が帰った数分後、他の生徒の注目を浴びながら、ある男女が堂々とやって来た。

その時には、『正体判明』と『裏切り者』というタイトルの本は、この図書室から消え失せていた。

ある女の場合（後書き）

<解説>

何事にも無関心で、常に人をバカにしたような態度の主人公。ある日、本を紹介するためにタイトルだけを書いた紙を友達の席へ入れようとし、間違えてのクラス男子のところへ。そして偶然にもその男が隠していた事実のせいで、内容が一致してしまう。本性を知った主人公は、その男と共に自分に正直になろうと決意することができた——という前向きな話。

友達に紹介する本か？と突っ込みがきそうですが、主人公はそういう人です。人間不信に近い感じ。

最後に、読んでいただいた皆様に感謝いたします。
それではまたの機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5372g/>

主人公の歩む道（恋愛編）

2010年10月10日18時03分発行